

中央ヨーロッパにおける集落空間の伝統的な秩序形成技術に関する比較研究（２）（梗概）

齊木 崇人

1. 研究の目的と背景

地球環境の危機が広く認識され、その保全のための具体的行動が模索される中で、持続力ある伝統的な集落空間の特性が評価されつつある。この背景には環境との調和を基調とした人類社会の長期的発展を成し遂げる道として「持続可能な開発」が叫ばれていることが挙げられるが、本来、集落空間は、自然環境と共生しつつ環境を改変し、住む人々と空間のもつ特性を持続する技術や、内部化された意志決定の仕組みをもっていたと言える。とりわけ、これらの集落空間は、第2次大戦以降の経済活動中心の政策により、環境と資源の制約を無視することによって成立した新しい空間とは、最も遠い存在と言っても過言ではあるまい。これまで私たちは、このような近代化の流れの中で一見、遅れたとされてきた集落空間を、逆にその固有性と伝統性に着目し、環境にやさしい持続性の高い居住空間として再評価して実施した、集落空間の秩序形成の研究²¹⁾に続き、東アジアの集落居住空間の秩序形成技術の比較研究を行ってきた²²⁾。

本研究は、これらの成果に加えて、中央ヨーロッパ世界を射程に取り込み、特に文化的差異（独語圏・仏語圏・伊語圏・レートロマンシュ語圏）がありながら共存し、多様な集落環境が見られるスイスを対象として調査を進め、これらを素材として、集落空間の秩序形成技術を明らかにすることを目的とした2年度目の報告である。

2. 研究の方法

本研究は、前年度に引き続き集落空間を対象として、フィールド調査、記述、比較、分類、理論化する手順で進められている。それは、個別の対象集落を現地で観察・記述し、得られたデータを比較・分類することにより、その中から仮説を導き出す、いわば仮説発想法と言ってよいプロセスを繰り返し、その仮説の普遍性を確かめつつ理論を導き出していくという方法を基準としている。特に本年度は、典型的集落事例として10集落を選び調査を実施した。

3. 調査集落の選定と調査内容

本年度は初めに、初年度に類型化した分類の再検討と、

典型となる集落事例集落の選定を行った。

再調査を踏まえ、先に示した26の集落の立地概念モデルを使い、その上位の分類を事例に従って再検討を行うと、特に峠集落は、丘陵地の山頂から尾根や鞍部に立地する集落へ含まれ、更に山裾にある尾根型緩斜面集落は、丘陵地の山裾又は丘陵に囲まれた平坦地、及び、山間に分布する集落に含まれることから、10分類に修正することが可能となった。その結果、典型事例として図2に示す10集落を選定した。この典型事例の選択では、それぞれの分類の最も代表的な集落を選ぶことと併せて、スイスの集落空間の多様性が失われないよう心掛けた。

次いで、集落空間の秩序形成技術を把握する調査の基本的視点は、前年度に示した通り、人間を主人公に据え、その集落が立地する「土地」の条件を把握しなければならない。この土地の条件の把握は、土地利用と景観との関係の把握であり、人間が自然とどのようにかかわってきたかをとらえることとなる。

更に、集落空間を対象としていることから、何よりも人々の手によって作られた「もの」すなわち、建造物とその集合に目を向けることは必須となる。また、「土地」「もの」に働きかける人々の生産活動や社会的活動を「営み」「もの」として取り上げることも肝要である。この「土地」「営み」「もの」とその相互関係の把握は、1) 人間の自然環境へのかかわり、2) 居住形態の空間構成、3) 生産・生活活動と社会組織の把握、により具体的に把握されることとなるが、最終的には、集落空間の秩序形成技術の把握を目的としていると言わなければならない。

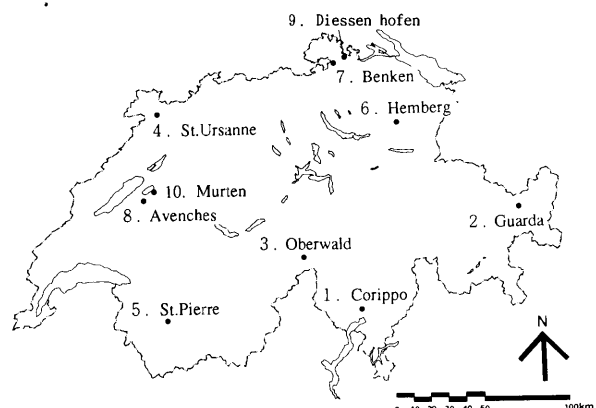


図1 調査事例集落の分布

以上のことから、本年度は集落空間の秩序形成技術を読み取るための構成要素として、1) 生産域、2) 居住域、3) 聖域、4) 中間域、5) 道、6) 水系、を選定し、典型事例を通してその特性把握を行った。

4. 集落空間の秩序形成技術を把握するための構成要素

1) 生産域

集落を取り巻く生産域は耕地、採草地、放牧地等に分類されるが、その生産域は特に居住域との関係を配慮しつつ土地の持つ土質、地形等の地勢単位に適合した再生力を配慮した利用形態を持つ。特に季節によって低地から高地へと移動しつつ利用するアルプに特色がある。

2) 居住域

集落空間の中心域である。特に適切な日照や通風に気を配り、災害から身を守る工夫や、世代を越えて集まり住み続ける工夫等が見られる。特にスイスでは傾斜地形の地勢単位をうまく使いこなす手法が見られ、特に分散型配置と適正規模の住居単位のあり方の地域特性を把握する。

3) 聖域

共同でそこに生きる証として、最も安定した場所が選択される。そこは世代を越えて持続されてきた場所であり、集落の立地と人々が選択してきた文化の蓄積が最も素直に現れる場所であり、共同性が最も空間化される所である。

4) 中間域

集落空間の中で配分された、生産域・居住域・聖域のいずれにも属さない領域である。敢えてそれら之间存在することから中間域と命名するが、土地利用の変換部分であり、かつ積極的に改変せずに残す工夫には、人間と自然の共存の姿勢として多く学ぶ所である。

5) 道

集落の中で配分された土地は、道路によって連結される。集落への入口となるアプローチ道路、集落内の生活道路と広場化した道、集落内から生産域への獣道を含めた生産用道路等の種類が見られるが、これらの道の多くは、水害や地形崩壊を避け、安定した尾根型地形を選択している。

6) 水系

尾根線に囲まれた1つの地勢単位を、集水域としてとらえた集落の領域を確認する指標となる。安定した量の水を得ることのみならず、災害と背中合わせであることと相まって、常に多くの人がかかわり、手を入れて持続させる工夫が多く見られる。

5. 典型事例集落の調査内容

典型事例集落の初年度の調査結果資料を再整理し、秋期及び冬期の再調査を行った。秋期の調査ではセスナ機

を利用し、空からの撮影を行い、冬期の調査では先に示した集落空間の構成要素に従い、集落内部の部分的実測及びヒヤリング調査、更には各ゲマインデ(行政の最小単位)で作成されている土地利用を含む空間計画、歴史的資源の保存計画等に関する資料を得た。

表1 スイス集落の類型と典型事例集落

山地	1. 白旗の急傾斜	Corippo	(184)
	2. 白旗の緩傾斜	Guarda	(68)
	3. 中間谷底の上流末端部	Oberwald	(197)
	4. 白旗の支流河川合流点	St.Ursanne	(227)
丘陵	5. 扇状地又は洋館面土	St.Pierre	(293)
	6. 山地や丘陵地の山頂から尾根や鞍部	Hemberg	(347)
平地	7. 丘陵地の山頂又は丘陵に囲まれた平地	Benken	(9)
	8. 平地の中の小高い丘	Avenches	(259)
	9. 大きな川沿いで少し高い段丘上	Diessenhofen	(14)
	10. 流に沿いの平地	Murten	(249)

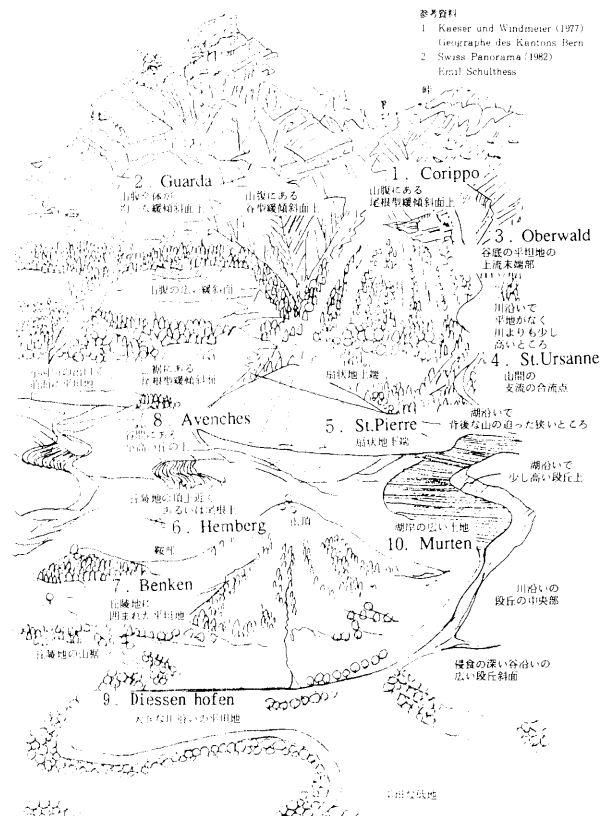
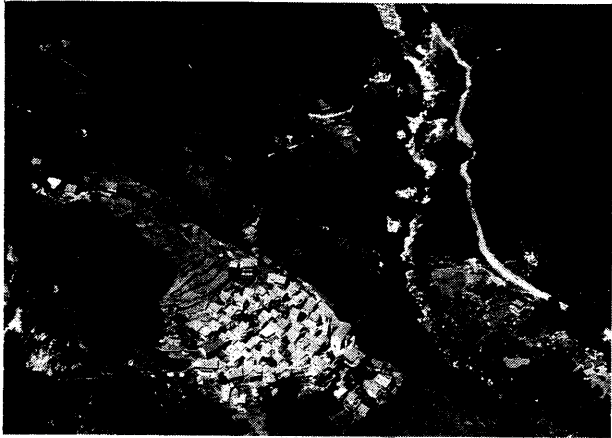
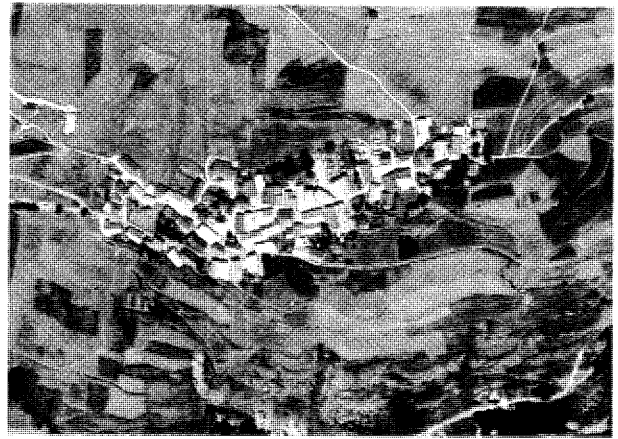


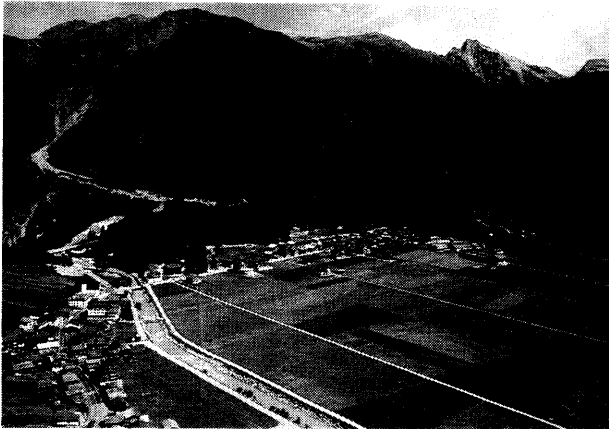
図2 スイス集落の立地概念モデルと典型集落



写1 Corippo



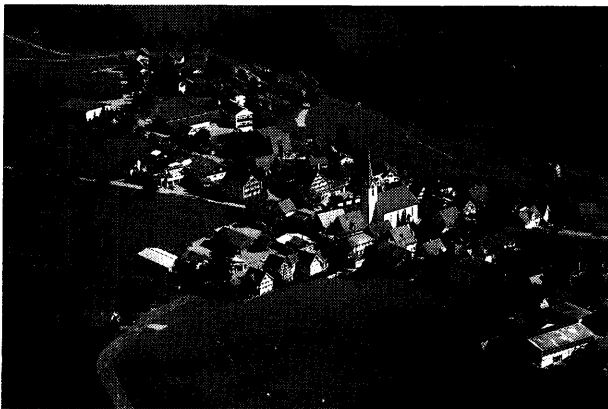
写2 Guarda



写3 Oberwald



写4 St. Ursanne



写5 Hemberg



写6 Benken



写7 Avenches



写8 Diessenhofen

表2 調査事例集一覧

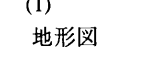
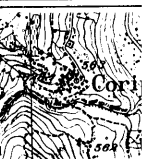











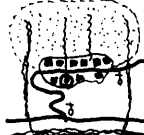

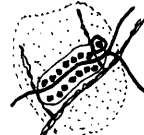
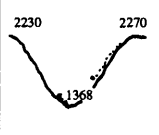


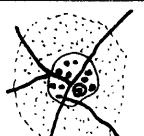
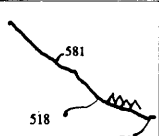
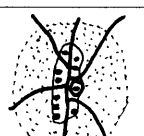
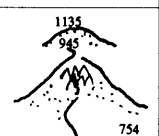
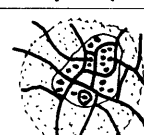
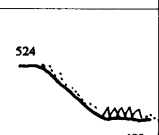
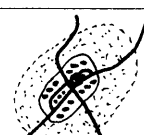
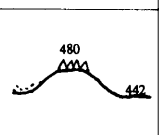
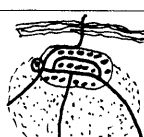
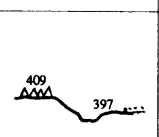
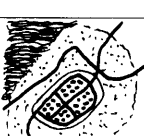
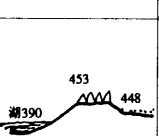
特性把握項目 事例集落 (調査番号)	(1) 地形図 	(2) スイス 地区区分	(3) 主要言語	(4) 主要宗教	(5) 集落立地	(6) 農業的 土地利用	(7) 影響を与える 卓越風又は災害	(8) 主要 植生	(9) 建築架構 の特性
1. Corippo (184)		アルプス山地南	イタリア語	カソリック	山腹の狭い急斜面	牧草・放牧地山地及び夏期アルプ牧草地卓越地域	北ヨーロッパ亜北極からの谷型フェーン地崩れ	シラカバ クリ ブナ	石積み建築
2. Guarda (68)		アルプス山地東	ロマンシュ語	プロテスタント	山腹の広い緩斜面	牧草・放牧地山地及び夏期アルプ牧草地卓越地域	雪崩・地崩れ	カラマツ	木造校倉と石積みを組み合わせる
3. Oberwald (197)		アルプス山地西	ドイツ語	カソリック	山間・谷底の上流末端部	牧草・放牧地山地及び夏期アルプ牧草地卓越地域	雪崩	トウヒ リンデン	木造校倉と石積みを組み合わせる
4. St.Ursanne (227)		ジュラ山地	フランス語	カソリック	山間の支流河川の合流点	耕地及び牧草地卓越地域	なし	ブナ モミ	柱の間を木材で仕切り石を組み合わせる
5. St.Pierre (293)		アルプス山地西	フランス語	カソリック	扇状地の末端部	耕地及び牧草地卓越地域	地中海から頻繁に吹くフェーン嵐	シラカバ クリ ブナ	木造校倉と石積みを組み合わせる
6. Hemberg (347)		アルプス前山	ドイツ語	カソリック・プロテスタント	丘陵地の山頂から尾根の鞍部	牧草・放牧地山地及び夏期アルプ放牧地卓越地域	地中海から頻繁に吹くフェーン嵐	トウヒ ブナ モミ	木造校倉と石積みを組み合わせる
7. Benken (9)		ミッテルランド中央平野	ドイツ語	プロテスタント	丘陵地の山裾丘陵地に囲まれた平地	耕地卓越地域	大西洋から吹く海洋性の西風	ブナ リンデン	木造軸組で、壁を木造の格子と粘土又は石積みとする
8. Avenches (259)		ミッテルランド中央平野	フランス語	カソリック	平地の中の小高い丘	耕地卓越地域	東方からの大陸性の強い風	ブナ モミ	柱の間を木材で仕切り石を組み合わせる
9. Diessenhofen (14)		ミッテルランド中央平野	ドイツ語	プロテスタント	大きな川沿いの少し高い段丘上	耕地卓越地域	大西洋から吹く海洋性の西風	ブナ リンデン	木造軸組で、壁を木造の格子と粘土又は石積みとする
10. Murten (249)		ミッテルランド中央平野	ドイツ語	プロテスタント	海岸沿いの平地	耕地卓越地域	東方からの大陸性の強い風	ブナ モミ	柱の間を木材で仕切り石を組み合わせる

表2 続き

(10) 集落 パターン	(11) 集落空間の特性						
	① 生産域 (※数字は標高:M)	② 居住域	③ 聖域	④ 中間域	⑤ 道	⑥ 水	⑦ その他
	 1982 集落上部 アルプ 628 林間放牧 563 485 夏 アルプ 冬 出稼	狭い急傾斜地に密集する 2つの深い谷に挟まれた所	教会の下端中央にカソリック教会を持つ 入口3カ所に祠を持つ	利用不可能な急傾斜地 中世末期の防衛性の高い集落	外から橋を渡る 内部は等高線に添った道 放牧地へ続く急な山への道	コリッポ谷の支流から流れる水を1879年に引き、集落内に4カ所の泉を作る	日照時間が短いため、住居配列と住居形態が有効に働いている。住居の採光を通りへの採光に工夫が見られる。住居の壁を作ることが地形を維持すること。
	 2500 アルプ 1653 1400	広いテラスに分布 イン川に流れる 2つの小水系に挟まれた凸型テラス	集落の中心	イン川や支流との間の急斜面	等高線に添って形成された道	ラ・クロクサ川の 上流からの湧水を得る	カラ松の校倉づくりの上にロマンシュの塗りこめ絵をかきおとす。 ローマの文化を引き継ぐ。
	 2230 1368 2270	山間の 上流末端部 平坦地に集まる	集落の上流部	山への斜面地と水系沿いの斜面地	谷の道の方向と谷から上へ方向が明瞭(めいりょう)	氷河から流れるミルク色の水と山から流れる水を得る	道沿いに切妻を見せて並ぶ。鼠(ねずみ)返しを持ち、並行配列の住居。
	 812 438 丘の上の生産域	谷底の川沿いに集まる	教会を中心に形成された集落	谷からの斜面地	谷の方向に添った道	支流からの水を引く	教会を中心に集まった集落形態。
	 581 518 475	扇状地の下端に集まる 同心円的な土地利用	集落の中心に教会がある 入り口に墓地が集まる	居住域と耕地との間の家庭菜園	八方に広がる等高線に添った道と、山地へ登る道	どこでも地下水を得ることができる	網の目分散型道路。
	 1135 945 748 754	丘陵の川沿いに分布	集落中心にプロテスタントの教会 山手にカソリックの教会	水系沿いの斜面地	尾根に添った道	上流から引く	尾根上から見る周辺の風景。 なだらかな丘陵地が続く
	 524 408	山裾の凹型地形に集まる 自発発生的な生長	山裾で道の交差するところ	道沿い 山沿い	幹線道路は等高線上に並ぶ	山からの湧水あり	宅地とその道路との切れ目が不明瞭。ミッテルランドに多く見られる。
	 480 442	高台の上にある	中心の教会	城壁と門を持つ 石積みで取り巻く	北西から東西への道をつける	古く、上流から水道を引く	ローマ都市の形成パターンを持つ。
	 409 397	川沿いの微高地 10m上がった上に規則的に分割される	西のはずれ(入口)にある教会域	城壁と門橋を持つ	グリッドの パターン割	支流の上流から引く、ライン川沿い	ローマ都市の形成パターンを持つ。
	 453 448 湖390	湖沿いの約50m上がった微高地に計画的に分割形成される	東のはずれ(入口)に教会	城壁と門 斜面石積み	グリッドの パターンと集落の外周を取り巻く リング	東南の支流から引く	ローマ都市の形成パターンを持つ。

6. Corippo (典型事例集落1. 他事例は省略)

6-1. 概要

Corippo はスイスの南、イタリア語圏域のカントン・ティチーノのアルプス南山地域に位置し、主要宗教をカソリックとする集落である。

ベルザスカ川の谷沿いを走る道から約150m 登った東南向きの山腹急斜面に集まる約40世帯の人々が住む。生業は出稼ぎと放牧が中心である。放牧地帯は集落の上部、海拔628m から1982m 間での高低差の中で行われ、放牧卓越地域である。林間放牧が行われている地帯は、シラカバ・ブナ・クリを主要樹林とし、建築に適した樹林は少なく、そのため、この地方の住居は集落の周辺でとれる石材を中心に利用した石積みの建築架構で造られているところに特色がある。



図3 上空から見る Corippo

6-2. 発生と変遷

Corippo の歴史上の記録は1343年^{さかづは}に遡ることができる。当時 Corippo は谷沿いの下流にあるボゴルノに含まれ、ミラノの支配下にあった。その後1411年9月

図4 立面スケッチ

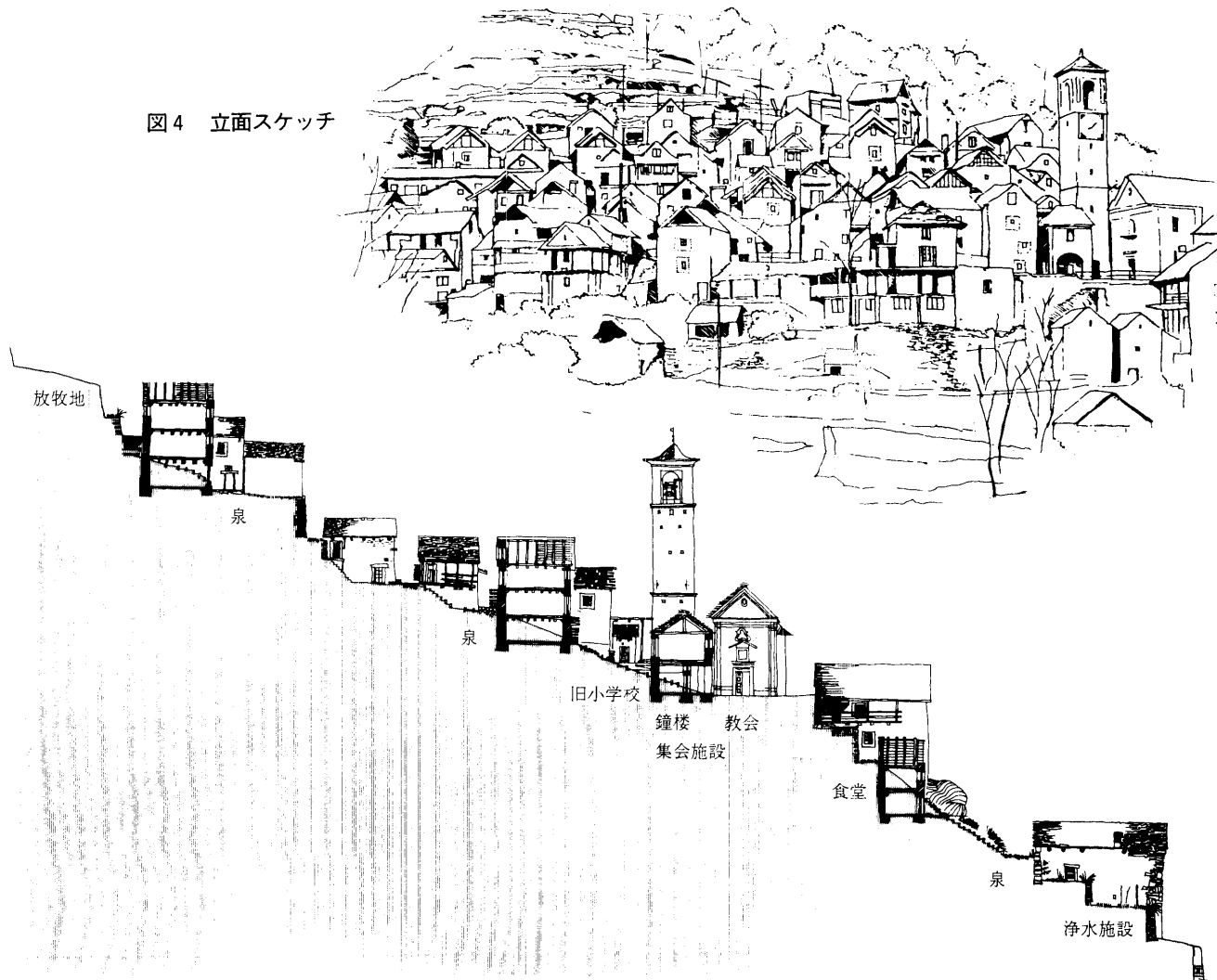


図5 断面と施設配置

13日、支配者であったサヴォア家のアメディオの急死により、Corippoの谷は不安定な時代を迎えた。更に1416~1422年にかけて現在のスイスの支配が始まり、1513年に周辺域が制圧されている。1798年の終わりに最終的なスイス連合に入ったとされるが、それに先立つ1726年には自治主義組織に吸収され、村の中の入口にあるカルメ会の聖母マリア教会は1664年から17C末まで増改築を繰り返している^(註3)。これを機会に自治組織形成が図られていった。

これらの歴史からとらえると、今日に至るまで、イタリア圏域とスイスゲルマン域との狭間^{はざま}にあり、常に揺れ動いてきた地域と言ってよい。

このような歴史的な特性に加えて、Corippoの人々の性格は厳しい自然条件を背景に出稼ぎの伝統によって形成されている。特に男性は、冬期間の煙突掃除の技術職人としての特別な技術を生かし、都市域で働き、夏の間はアルプあるいは、下流低地に広がるマガディノ平坦地に移り、放牧によって生活をしてきた。これらの労働では常に収益は低く、その経済力では住居を大きく改変するだけの力を持ち得なかった。男たちは、住居内に自分たちの特別な空間を持ち得ない。すなわち、居住空間は村に残る女性・子供・老人を主体として構成され、規模は小さく、各居室は直接道路に面して入口を持ち、2階へ上がる場合は、1度外部に出て移動することとなる。道は各居室をつなぐ廊下の役割も併せ持つ、セミプライベートな空間である。

6-3. 集落空間の特性

1) 生産域 集落の位置する標高563~628m周辺は林間放牧地として利用されているが、特に夏期は集落の背後に続くアルプ、約1900mまでのアルプを集落の領域として活用している。この高低差や地形に合った斜面地をくまなく活用することにより、国土の保全の一端を担っているとする。

2) 居住域 狭い急傾斜地に密集する住居は、日照と眺望を強く意識して配置されている。規模の小さい切妻型の屋根は谷側に向き、その東南向きの窓から日照と風を有効に取り入れることができる。1階は家畜小屋、もしくは台所として、2階は寝室、もしくは居間として、3階や屋根裏小屋は寝室や倉庫として利用されている。これらの部屋にはそれぞれ、外部から直接入れる入口や階段付きの入口があり、独立性は高い。複数の利用者が1棟を共同で使用する、又は1家族が数棟を利用している場合もあり、必要に応じて居室の増減が調整できる。いわば、集落全体が大きな家と言える。また、住居の壁と屋根は付近で採集できる石材を利用し、床や、小屋梁は、斜面地に育てている2次林のクリ材を多用している。この外壁の石積みが隣の外壁に連結して、そのまま集落

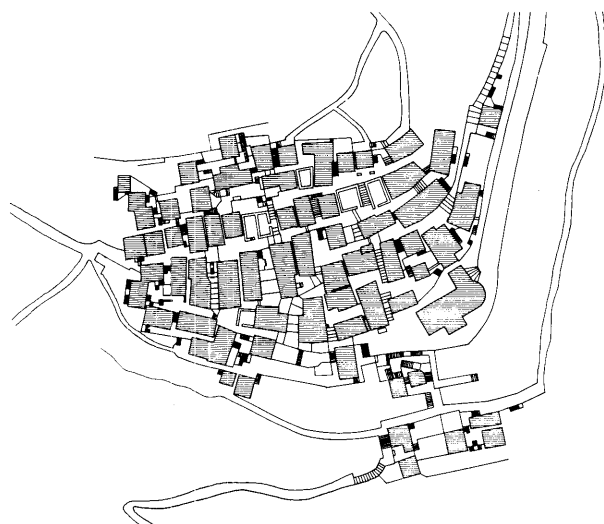


図6 建物と道の分布図

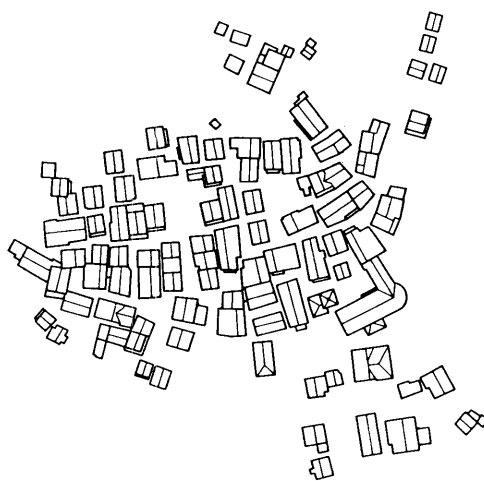


図7 屋根伏図

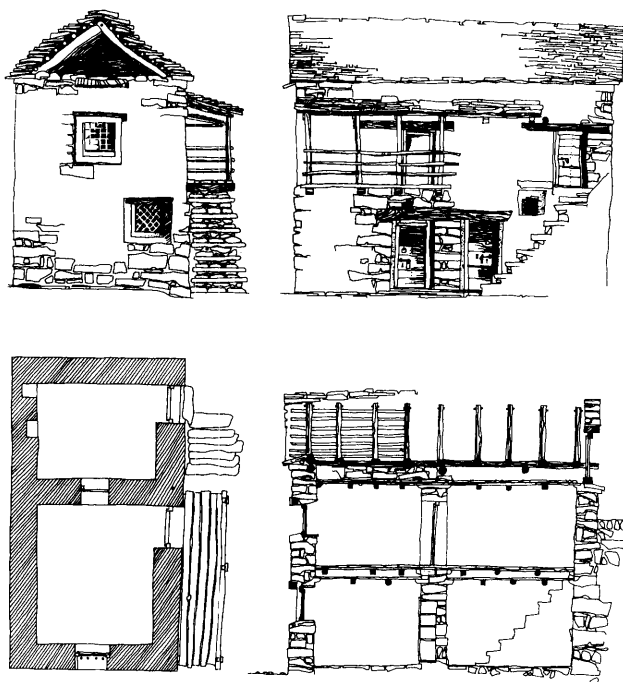


図8 住居の事例・立地・平面・断面

の地形を維持する石積みとなる。すなわち、自分の住居の外壁を常に修復することは、集落全体の地形・地盤を維持していることとなる。

3) 聖域 集落の入口に門を持つ教会がある。この教会の周辺に集会施設、旧小学校等の公共施設が集まる。この場所は集落の中で最も日照と眺望が良く地盤も安定した場所と言える。この教会は集落の中心の聖域であるが、更に聖域として4カ所の祠がある。1つは谷から上がってくる途中の祠であり、もう1つはアルプへ上がる出口にある祠であり、更には、アルプの入口で集落全体を見渡すことのできる標高750mに位置する祠である。最後の1つは、集落の南にある、ミグロツシア集落への道沿いでCorippo川にかかる橋のたもとにある祠である。いずれも、集落の居住域との可視的境界域にあり、教会の鐘楼が見え、その祠から見る外の領域は眺望良く、内と外との結節点にある心地良い空間と言える。

4) 中間域 Corippoの居住域は、その周辺が急傾斜面で囲まれている。中世の不安定な情勢の中で成立したことから考えると、この斜面地形がCorippoを保護した重要な中間域と言える。現在でもこの急斜面地形には、シラカバ・クリ・ブナ等が生育するが、人々が登り降りすることを拒んでいる。と、同時に集落の居住域の拡大を強く制御してきた。現在のCorippoが存続する上で重要な領域と言える。

5) 道 集落内の道路は、地形等高線に添った6層の横の道と、それを連結する山側から谷側への階段や斜路形成された縦の道によって構成されている。道とは言っても階段や斜路が多いことから、車が入れるのは集落の下端部の教会前の広場周辺までである。それから内は、人間と家畜の道となる。また、これらの道は、建物が建てられた後の残った空間が結果的に連結し、道や小広場化した空間をつくる。居室への入口は、それぞれこの道から直接あるいは階段を使って入り、この居室を内部で結ぶドアは少ない。道が、各居室を結ぶいわばCorippoという大きな家の廊下の役割を果たしている。この石積みの階段と斜路によって形成された道と各居室の入口との間には、不整形な小さな余裕地があり、老人の溜まり場、子供たちの遊び場ともなる。

6) 水系 等高線に添った道と山と谷を結ぶ道の交点の6カ所に泉がある。これらの泉は1879年にCorippo川の上流から居住域に引いた水道である。かつてはこの水を共同利用していた。現在は各家々に直接に水道を引いている。また、集落の西南にあるCorippoの谷にはかつて水車があり、利用されていた。更に近年家庭の雑排水及び雨水排水を浄化する施設が教会の西南側に建設され、下流への影響を配慮している。

7. 集落空間の秩序形成技術の考察

1) 地勢を生かした土地利用単位

スイスの集落は地形の斜面や高低差を生かして形成されている。その生かし方として地勢単位でいう、谷型地形と尾根型地形を分けて使う。特に谷型地形には、水系や水脈があることから、大きな改変はせず、採草・放牧地として利用するほかは樹林帯として保護している。また、緩やかな尾根型地形で安定した土質である場所は、居住域あるいは採草・牧草地として有効に活用している。特に聖域が立地する地勢単位は、必ず尾根型地形の上端部にあり、多くは氷河が移動し、つくってきたモレーン上にある場合が多い。そのようにまず良い地勢単位をうまく選択し活用することが集落空間の秩序形成の基本となる。

2) 微気候に対する配慮

スイスに大きな4つの卓越風がある。このほかに、起伏に富んだ地形であることから、それぞれの谷や丘陵地に特色ある微気候が発生する。この微気候は、風と気温と日照・湿度によって演出されるが、特に日照時間に対する配慮と、風の方向に対する配慮は集落の居住域と土地利用を観察することにより理解される。風が強く吹く側には開口部を極力少なくして、場合によっては樹林帯をつくるなど住居の配列と、集落空間のディテールに表現されてくる。更に、アルプス南山地域のフェーン現象が発生する地域では、冬期の終わりに雪崩が多発する。冬期調査を行い、集落の立地を見ると雪崩を巧みに避ける場所で選定の根拠がよく理解される。

3) 再生力を活用する技術

アルプの放牧は移動しながら行われる。毎年是利用せず、また、冬の間は休ませるなどの定期的な土地利用は、自然の再生力を生かした有効な方法と言ってよい。また、居住域では、数世帯が住み続けることにより、建造物の修復は世代を越えて持続して行われる。更に1度改変することによって再生力を失う場所は、敢えて改変せず積極的にかかわって残すという姿勢も強い。特にそのように弱いと思われる場所では、一般の自動車や人間の利用を制御することも有効に働いている。特に近年は、より自然に近い自然を求めて、コンクリートの擁壁を砂利と草と土の土手に改変し、植物や土が持つ再生力を活用した水際の事例は、多く見られるようになった。水系のエコシステム・水際の共有システム術と言ってよい。

4) 持続するための技術

大規模な急激な変化による消耗よりも、バランスのとれた適正規模の住居単位や、安定した場所の選択は、集落空間の環境の質を持続させる。そのような対象の多くはどちらかと言うと厳しい環境条件を克服して初めて得た、積極的な意味の持続性と言ってよい。特にこの100年

来の近代化による急激な変容よりも、変化せず持続してきたことを逆に評価すべきである。更に、あらゆる集落に必ず教会がある。プロテスタントとカソリックに多くは分かれるが、1つの教会で両者が時間を変えて利用している場合もある。主要宗教が変化しようとも、その場所は共同で生活する証としての持続する空間として位置づけられている。

5) 自立分散型配置と多様な立地選択

起伏に富んだ地形では、地勢単位を土地利用の原単位とすることから大規模な生産域は生まれにくい。適度に区切り分散させ、配置することにより、その災害等の危険の度合を緩和することが可能となる。特にスイスでは、起伏に富んだ地形に加えて、集落の領域には高低差があり、季節に応じてその標高差を使いこなすことはアルプの生活として知られているが、1年の周期で標高の異なる多様な場所に移り住む方法は、氷河時代から人類が行ってきた方法であり、今後も継続される貴重な生業形態と言ってよい。また、居住域で見ると、過度な集中を避け、分散型配置による住み分けと、複数の住まいの場を活用する多様な選択にも特色がある。

6) 共存・共生のための工夫

人間の生存だけでなく、動物・植物も共に生きるという自然の中での共生思想は根強くある。人工物で大地を

覆い隠すよりも、自然の地表を残し、生きた大地を創造していくという、小生態圏やバイオームの考え方も、より自然に近い、自然を求めた古くて新しい工夫と言ってよい。

更に、集落の中には農村的機能と、都市的機能が必ず共存している。小規模の集落中にも必ず都市的公共施設は確保される一方、都市的傾向の強い集落の中にも必ず農家があり、共存している。都市と農村を2極対立でとらえるよりも、より近い共存・共生の関係としてとらえ直すことが必須と言わなければならない。

8. まとめ

このようにとらえてきたスイスの集落空間の秩序形成技術の把握は、大きく3つの技術としてまとめることができる。

初めの1つは「集落空間の把握の仕方・認識の仕方」である。これらは集水域で囲まれた、あるいは集落の領域の設定の仕方に示され、次いで地形を生かした生産域、居住域、聖域、中間域などの土地利用の単位が、微地形という地勢を尾根型地形と谷型地形で使い分けている方法の中に示される。このことは住む人々が行う、自分のかかわる集落空間の場所の認識の仕方であり、古くは初めに住んだ人々の場所の選定態度を読み取ることとな

表3 集落空間の構成要素と秩序形成技術

秩序形成技術 構成要素	1. 地勢単位を 生かす	2. 微気候への 配慮	3. 再生力の活用	4. 持続する技術	5. 自立分散型 配置	5'. 多様な選択	6. 共存・共生
1) 生産域	地形に適した 土地利用単位	季節によって 利用域を使い 分ける	季節により移 動しながら再 生させる	適正な利用単 位	分散型でリス クを避ける	高低差を生か した生業形態	土地に合った 複数生産形態
2) 居住域	傾斜地形を 生かす	日照と風への 意識、災害へ の配慮	数世代で住み 続ける	適正規模の住 居単位と住居 集合	分散型配置	住み分け・ 複数の住居地	共同で住む
3) 聖域	小高い丘の上、 モレーン	東を向き、気候 の安定した場所 を選定	数世代にわ たり修復を 繰り返す	住民が常時関 われる安定し た場所	中心部の教会 と同縁部の祠	宗派の異なる 村が共同で場 所を使う	カソリックとプ ロテスタントが 共同で使う教会
4) 中間域	地形の変換点 を残す	風水害を防ぐ、 樹林帯を育てる	改変せず積極 的に残す	改変せず積極 的に残す	未利用の中間 域が分散型を 支える	中間域が持つ 多機能性	中間域が要素を つなぐ
5) 道路	尾根型地形と 等高線に添った 道	風水害への 対応	車や人間の利 用を制御	安定した地形 に形成	分散型ネット ワーク	網の目状の 道路	集中しない 工夫
6) 水系	尾根線に囲まれ た地勢単位	風水害への 対応	より自然に近 い水辺の活用	常に人間が身 近で関われる	小規模の水系 と末端の処理	使用目的に よって水源を 使い分ける	人間と動物の 共生ゾーン・ 上流と下流

る。また、全体的には、この集落空間の把握の仕方はその集落空間への出入口と、中心、あるいは周縁に位置する教会や共同施設の立地場所との関係の中に記憶されている場合が多い。そのような場所にかかわることにより、そこに住み続けてきた人、あるいは初めてそこにきた人々が共有化できる「集落空間の把握の仕方」を導く仕掛けは、集落が存続するための重要な技術と言ってよい。

この技術を補う役割として、地図と場所名がある。記載された地図や場所名は、その集落空間を把握する、あるいは認識することを側面から補助してくれる重要なデータである。

次に示される秩序形成技術は「集落空間へのかかわり方の姿勢」である。これは、考察の中で示した微気候に対する配慮や、自然が持つ再生力を活用する技術や、自立分散型配置等の中のディテールに強く現れてくる技術である。具体的には、日照を得、風を防ぐ工夫、災害から集落や住居を守る工夫や、限りある資源を一定のサイクルで使用し再生することを待つ方法、あるいは、単世代で修復するより数世代にわたって修復し続けるかかわり方などである。そこに住む人々の場所へのかかわり方は、まさに生きる姿勢として営みの中に現れてくる。この営みを観察することにより、集落空間へのとるべき態度を読み取ることが可能となる。ただし、これらの営みの結果形成されたディテールは、即、他に応用のできるものではない。それぞれは、その集落空間の他のディテールと関係を持ち、集落空間総体で存在しているものである。

最後の1つは、「集落空間の概念化・あるいは価値づけの技術」である。これは、共同性の高い建造物によって読み取りが可能となる。例えば、教会や広場の位置や方向、道路のパターン、周縁に分布する祠等、は集落空間を持続させるための「もの」としての役割を持つ。そこに置かれた「もの」は単なる施設としてだけでなく、集落空間の秩序を概念化あるいは価値づけの役割を併せて持つこととなる。

あとがき

スイスの集落を事例として、集落空間の秩序形成技術を考察してきたが、これらの秩序形成技術は、人間が環境へかかわるときの関係を読み取ったものと言ってよい。それらは「人間がその場所をどのように把握するか」そして「人間はその場所でどのような営みの姿勢をとるか」更には「その結果、意味づけられ、価値づけられたものをどのように創るか」という「場所」「営み」「もの」の諸関係の中で成立していると言えよう。

更にこれらを、先に考察した東アジアの集落空間の秩序形成技術と比較してみると、大きく異なる部分として、集落空間の全体の形成の中に、太陽や天体の方位認定や

宇宙観を展開して集落空間に方向軸を取り込んだ理念的な秩序形成の事例が少ないことが挙げられよう。これらの理由として、いくつか見られるローマ都市形成時代の事例を除いて、スイス集落は地形の持つ方向や水の流れる方向に強く規制されていることが挙げられよう。わずかに、精神的生活を具現化し、東を向かせるという教会施設の配置に示される程度である。一方、東アジア集落空間の秩序形成技術と共通している部分としては、エコロジカルなシステムに適合させることを具体的に秩序形成の技術として生かしていることであろう。特に地勢や水の系を集落立地や生産域、更には居住域の構成の中で生かしていく姿勢は、常に自然にかかわり合っていくとする人類に共通した持続的姿勢と言える。

最後に本研究を進めるにあたり、スイス集落の調査では4年間にわたり大村 纂教授（スイス連邦工科大学）に御指導いただいたことに深く謝意を表します。

<注>

- 1) 齊木崇人：農村集落における地形的立地条件と空間 構成に関する研究、1986年
- 2) 齊木崇人：東北アジア集落の空間構成とその秩序形成原理に関する研究—1— 日本建築学会学術講演梗概集、昭和63年10月
- 3) ALDO ROSSIほか：LA COSTRUZIONE DEL TERRITORIO、1989

<研究組織>

主 査	齊木 崇人	神戸芸術工科大学芸術工学部 助教授（環境デザイン学科）
委 員	Gaudenz Domenig	スイス連邦国立科学財団 研究員
"	Vito Bertin	スイス連邦工科大学建築学科 助手
"	渋谷 鎮明	名古屋大学大学院文学研究科地理学専攻 博士課程
"	守 隆	神戸芸術工科大学 研究生
協力者	Brunenn Felix	スイス連邦工科大学地理環境学部 博士課程
"	Ostertag Ralph	同上 修士課程
"	Christoph Langeman	チューリッヒ大学日本学 博士課程
"	Thomas Karrer	チューリッヒ大学日本学 博士課程
"	伊藤 潤	神戸芸術工科大学 学生
"	二位 貴子	同上
"	竹内 跡	同上